

武術における風格の定義

島津 京（専修大学）

長拳は、中国の伝統的な拳法から形成された中国武術のひとつである。20世紀以降、長拳は西洋スポーツの影響のもとで套路の採点競技としても発展した。套路とは、本来は仮想の敵に対する攻防動作の連続から成る、実戦的な技の組み合わせである。競技化した長拳において、套路は実用ではなく表現に力点が置かれるが、中国武術という自己同一性を保持している。だが套路競技の規則を分析した劉（2019）によれば、套路に跳躍や回転を含む難度動作が導入されたことにより、演武のスピードと華麗さは増す一方、攻防技術としての特徴を無視する傾向が生じた。そのため難度動作は制限されたが、長拳がオリンピック種目を目指す際に再導入され、武術性を示す基本動作の数は減らされることになった。

このように、長拳は「グローバル化」による変化と自己保存の間で、武術ともスポーツともつかない「競技化した長拳」という技の領域を生じさせている。本発表は、日本における競技化した長拳の「風格」理解を検討し、技に対して風格とはどのようなものであるかを考察する。

競技化した長拳は、三つの採点カテゴリーを持つ。技の動作を細分化し審査する減点方式のA組、風格、勁力、リズム等への加点を行うB組、難度動作が成功した場合に加点するC組である。このうちB組に属する風格とは、「套路全体の技術に現れる風貌と格調を指す」（『競技ルールと審判法』）。審査員は、「演武がその種目の技術風格に符合しているか」、「套路全体の技術風格が調和一致しているか、個人の特徴があるか」を見る。また「ミス」については、「長拳の套路からかけ離れている」「全套路の個々の動作の風格が同じ」ことが挙げられる。以上から、套路の技術を持ち、個人的特徴があり、調和

しつつ動作の多彩性を表現する力が演武に風格を与えると見える。

このやや抽象的な採点基準に対し、選手は風格をどう理解しているのか。発表者は、風格理解のプロセスを知るため、初学者に半構造的インタビューを行った。その結果、風格に取り組むのは套路の技の習得後であること、風格のイメージは身近な模範的存在（上級者）の動きを観察して獲得されること、風格は必ずしも言語的に定義されないことを確認した。例えば初学者A（長拳歴5年、10歳）は、風格を「かっこよさ、それっぽさ」とする。これは上級者の動きに関する印象であり、それが風格として解釈されている。その後Aは、動作スピードを増す、力を出す、動きに緩急をつけることに取り組む。Aはこれらを技とは区別しており、風格という観点から動作の更新を試みている。

以上のことから、技の習得、あるイメージを風格として理解すること、及び風格の表現は、関わりつつ区別されていることがわかる。風格のイメージは模範的な演武を見ることで得ることができ、中国思想や文化の理解は必ずしも前提とされない。むしろ模範的演武者の個人的特徴が観者に感銘を与え、風格と解釈される可能性がある。従って風格は、同じ技の体系内においても演者と観者という変数によって変わり得ると考えられる。また、初学者の動きに変化をもたらす点で、風格は、エージェントとしての機能を持つ。この点で「風格」は演者の身体性の変化を促し得る。こうした観点は、ダンスにおける個人的特性の位置付けに一視点をもたらすと思われる。

参考文献

劉 暢「中国武術における套路競技の過去と将来：武術規則の変遷と武術性の分析から」（武道学研究 52—(1)、2019）

アジア武術連盟編『競技ルールと審判法』（日本武術太極拳連盟、2013）